

学舎長日記

季節の変わり目を迎え、職員間で精神障害と向き合う支援について話題となるようになった。そんなある日、職員の外部研修報告で、小諸市と縁がある神戸文哉(かんべぶんさい)の名前が語られ、興味をそそられた。

旧小諸藩士の神戸は、医学を学び、1875(明治8)年、日本で初めての公立精神科病院「癲狂院(京都)」に、医員として勤める。宗教的な治療が重んじられている時代であったという。翌年、神戸はイギリスの精神医学者、H.モーズレイの著書を翻訳し、刊行。この書は、日本における最初の近代精神医学書とされる。

手元にある復刻書(精神医学古典叢書第4巻)(1973)「精神病約説」(創造出版)をひも解くと、精神病の治療法には、精神療法と薬物療法があること、精神療法は「外事に注意を向けさせ、作業や嬉戯(レクリエーション)に熱心になるようにすることが最良」としている。

個別支援で手立てを尽くしても進展せず、気持ちが晴れないこともあるが、課題と向き合い悩みながら尽力した地元の先人の存在を身近に感じ、勇気と励ましをいただいた。(小松) <一羔ニュース第523号より>